「俊寛」 作者：不明(世阿弥？)　番立：四番目物(雑能)

～あらすじ～

シテ・俊寛　ツレ・平判官入道康頼　ツレ・丹波の少将成経　ワキ・赦免使

平家全盛の平安末期。都の名刹、法勝寺で執行を務めていた俊寛僧都は、平家打倒の陰謀を企てた罪科により、同志の藤原成経、平康頼とともに、薩摩潟の鬼界島に流された。それからしばらくして、都では、清盛の娘で高倉天皇の后となった中宮徳子の安産祈願のため、臨時の大赦が行われ、鬼界が島の流人も一部赦されることとなり、赦免の使者がかの島へ訪れる。

成経と康頼は日頃より信仰心あつく、島内を熊野三社に見立て祈りを捧げて巡っていた。ある日、島巡りから戻るふたりを出迎えた俊寛は、谷川の水を菊の酒と名付けてふたりに振舞い、都を懐かしむ宴に興じます。ちょうどそこに清盛の使いが来て、大赦の朗報をもたらす。ところが赦免状には、俊寛の名前だけがなかった。驚き絶望の淵に沈む俊寛に、周りの皆は、慰めの言葉もない。やがて赦免されたふたりを乗せて舟は島を離れる。俊寛は、舟に乗せよとすがりつくが、無情にも打ち捨てられ、渚にうずくまる。あたり構わず泣き喚く俊寛に、同志たちは「都へ帰れる日は来る。心しっかりと」と声をかけるが、やがてその声も遠ざかり、船影も消えていく。

◎俊寛（1143年～1179年、35歳）

後白河法皇の側近で、平清盛の口利きで法勝寺執行の地位にあった真言宗の僧。信仰心が薄く強情不屈な性格。安元3年（1177年）、藤原成親・西光らの平氏打倒の陰謀に加わって鹿ヶ谷の俊寛の山荘で密議が行われた。だが、密告により陰謀は露見し俊寛は藤原成経・平康頼と共に鬼界ヶ島へ配流された。翌治承3年（1179年）、俊寛の侍童だった有王が鬼界ヶ島を訪れ、変わり果てた姿の俊寛と再会した。有王から娘の手紙を受け取った俊寛は死を決意して、食を断ち自害した。有王は鬼界ヶ島より俊寛の灰骨を京へ持ち帰り高野山に葬った。

◎平康頼/平判官入道康頼（1146年～1220年、31歳）

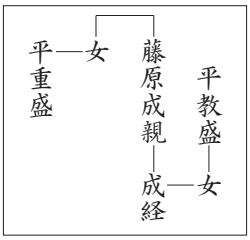
後白河法皇の近習として北面に仕えた武士。任地にて荒廃した源義朝の墓を修繕し名を上げ、後白河法皇に取り立てられ熊野詣でにも同行。今様を愛好した後白河上皇の門弟の一人で、美声で声量もあり抜きん出た歌い手であり、猿楽の上手でもあったが鹿ケ谷の陰謀に参加し流罪。配流先の鬼界ヶ島で京を懐かしむ日々の中、康頼は成経と熊野三所権現を勧請して帰洛を願い、成経とともに千本の卒塔婆に望郷の歌2首を記し海に流すことを思い立つ。この卒塔婆の一本が流れ流れて清盛の目に留まり、赦免の一因になった。

「薩摩方 沖の小島に 我ありと 親には告げよ 八重の潮風」

「思ひやれ しばしと思ふ 旅だにも なほ古里は 恋しきものを」

◎藤原成経/丹波少将成経（1156年～1202年、21歳）

後白河法皇に近侍した公卿。父の藤原成親が平家打倒をはかったことに連座して備中国へ流されるが、更に薩摩国鬼界ヶ島へ流された。翌治承2年（1178年）舅・平教盛の嘆願もあって中宮徳子の安産祈願の大赦が出され、康頼とともに赦免され京へ戻ることができた。配流中も教盛の手で物資が送られていた。



◎鹿ケ谷の陰謀

平安末期の1177年，京都郊外の鹿ケ谷でなされた平氏打倒の謀議事件。後白河法皇の近臣の藤原成親・西光法師・俊寛僧都らが中心となったが、多田行綱の密告により発覚し、西光は死罪、成親は備前国に配流後殺害され、ほかは薩摩国鬼界ケ島に流された。

…顔色を変えた成親が席をさっと立った時に狩衣の袖で瓶子を倒した。どうしたことかと問う法皇に、席に戻った成親が「平氏が倒れました」と申し上げると法皇は喜んで「皆の者、ここへ参って猿楽せい」と仰った。すると康頼が進み出て「余りにへいじが多いので酔い申した」という。俊寛が「そこで、それをどういたしたものでござろうな」と申すと西光が「首を取るのが分別」と瓶子の首を叩き割って奥の間に入った。…

平家物語 鹿ケ谷事件関連巻 「西光被斬」「小教訓」「少将乞請」「教訓状」「烽火之沙汰」「新大納言被流」「阿古屋松」「大納言死去」「康頼祝言」「卒都婆流」「赦文」「足摺」「少将都帰」「有王」「僧都死去」

◎鬼界ヶ島（硫黄島いおうじま）

鬼界カルデラの北縁に形成された火山島であり、ランクAの活火山に指定されている。港内は海底から鉄分を多量に含んだ温泉が湧出し、海水との反応で赤茶色に変色している。硫黄のために島の周辺海域が黄色に変色している。平安時代末期から流刑地。

…この島は都を出て、遠く難を堪えて行く所である。人は稀で、本州の人には似てもいない。色は黒くて牛のよう。身には盛んに毛が生え、言う言葉も聞き分けがつかない。男は烏帽子も被らず女は髪を垂れ下げない。着物もないから人には見えない。島には食う物もないので生き物を殺して捕るしかない。田畑が無ければ米穀はなく、桑もなければ絹もない。高い山があり永劫不滅の火が燃えている。そこには硫黄が充満していることから、この島を硫黄が島とも名付けた。雷が常に轟き、豪雨が降り、人間が生きていける環境ではない。…

「俊寛」

シテ　俊寛僧都
ツレ　平判官入道康頼
ツレ　丹波の少将成経
ワキ　赦免使

名宜　ワキ「これは相国に仕へ申す者にて候。さても此度中宮御産の御所の為に。非常の大赦行はるゝにより。国々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の内。丹波少将成経。平判官康頼二人赦免の御使をば。某承つて候ふ間。唯今鬼界が島へと急ぎ候

次第　康頼・成経「神を斎ふが島なれば。神を硫黄が島なれば。願も三つの山ならん

サシ　「これは九州薩摩潟。鬼界が島の流人の内

成経「丹波の少将成経

康頼「平判官入道康頼

二人「二人が果にて候ふなり。われら都にありし時。熊野参詣三十三度の。歩をなさんと立願せしに。其半にも数足らで。かゝる遠流の身となれば所願も空しく早なりぬ。せめての事の余りにや。此島に三熊野を勧請申し。都よりの道中の。九十九所の王子まで

下歌　「ことごとく順礼の。神路に幣をさゝげつゝ

上歌　「こゝとても。同じ宮居と三熊野の。同じ宮居と三熊野の。浦の浜木綿ひとへなる。麻衣のしをるゝを唯其まゝの白衣にて。真砂を取りて散米に。白木綿花の御祓して神に歩を。運ぶなり神に歩を運ぶなり。

一声　シテ「後の世を。待たで鬼界が島守と

地謡「なる身の果の。闇きより

シテ「闇き道にぞ。入りにける

サシ　「玉兎昼眠る雲母の地。金鶏夜宿す不萌の枝。寒蟬枯木を抱きて。鳴き尽して頭をめぐらさず。俊寛が身の上に知られて候

康頼「あれなるは俊寛にてわたり候ふか。これまでは何の為の御出にて候ふぞ

シテ「早くも御覧じとがめたり。道迎の其為に酒を持ちて参りて候

康頼「そも一酒とは竹葉の此島にあるべきかと。立ち寄り見れば。や。これは水なり

シテ「これは仰にて候へども。それ酒と申す事は。もとこれ薬の水なれば。醺酒にてなど無かるべき

二人「げにげにこれは理なり。頃は長月

シテ「時は重陽

二人「所は山路

シテ「谷水の

三人「彭祖が七百歳を経しも。心を汲み得し深谷の水

上歌　地謡「飲むからに。げにも薬と菊水の。げにも薬と菊水の。心の底も白衣の。ぬれて干す。山路の菊の露のまに。我も千年を。経る心地する。配所はさてもいつまでぞ。春すぎ夏たけて又。秋暮れ冬の来るをも。草木の色ぞ知らするや。あら恋しの昔や。思ひでは何につけても。あはれ都にありし時は。法勝寺法成寺たゞ喜見城の春の花。今はいつしか引きかへて。五衰滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃。飲む酒は谷水の。流るるもまた涙川水上は。我なるものを。物思ふ時しもは。今こそ限なりけれ

一声　ワキ「早船の。心にかなふ追風にて。舟子やいとゞ。勇むらん

「いかにこの島に流され人の御座候ふか。都より赦免状を持ちて参りて候。急いで御拝見候へ

シテ「あら有難や。候。やがて康頼御覧候へ

康頼「何々中宮御産の御祈の為に。非常の大赦行はるゝにより。国々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の中。丹波の少将成経。平判官入道康頼二人赦免ある所なり

シテ「何とて俊寛をば読み落し給ふぞ

康頼「御名はあらばこそ。赦免状の面を御覧候へ

シテ「さては筆者のあやまりか

ワキ「いや某都にて承り候ふも。康頼成経二人は御供申せ。俊寛一人をば此島に残し申せとの御事にて候

シテ「こはいかに罪も同じ罪。配所も同じ配所。非常も同じ大赦なるに、一人誓の網に漏れて。沈み果てなん事は如何に

クリ　「此ほどは三人一処に有りつるだに。さも恐ろしく凄ましき。荒磯島にたゞ一人。離れて海士の捨草の。波の藻くずのよるべもなくてあられんものか浅ましや。歎くにかひも渚の千鳥。泣くばかりなる有様かな

クドキ　地謡「時を感じては。花も涙をそゝぎ。別れを恨みては。鳥も心を動かせり。もとよりも此島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼あるところにて今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと此あはれなどか知らざらん。天地を動かし鬼神も感をなすなるも人の哀れなるものを。此島の鳥獣も鳴くは我をとふやらん

シテ「せめて思の余りにや

地謡「さきに読みたる巻物を。また引き開き同じあとを。繰り返し繰り返し。見れども見れどもたゞ成経

康頼と。書きたる其名ばかりなり。もしも禮紙にやあるらんと巻きかへして見れども。僧都とも俊寛とも書ける文字は更になしこは夢かさても夢ならば。覚めよ覚めよと現無き。俊寛が有様を見るこそ哀れなりけれ

ワキ「時刻うつりて叶ふまし。成経康頼二人ははや。御船に召され候へとよ

二人「かくてあるべき事ならねば。よその歎きをふり捨てゝ。二人は船に乗らんとす

シテ「僧都も船に乗らんとて。康頼の袂にとりつけば

ワキ「僧都は船に叶ふまじと。さも荒けなく言ひければ

シテ「うたてやな公の私といふ事のあれば。せめては向いの地までなりとも。情に乗せて給び給へ

ワキ「情も知らぬ舟子ども。櫨櫂を振上げ打たんとす

シテ「さすが命の悲しさに。又立ち帰り出船の。纜に取りつき引きとむる

ワキ「舟人ともづな押し切つて。船を深みに押し出す

シテ「せん方波にゆられながら。たゞ手を合はせて船よなう

ワキ「船よといへど乗せざれば

シテ「力及ばず俊寛は

地謡「もとの渚にひれふして。松浦佐用姫も。我が身にはよも増さじと。声も惜まず泣き居たり

上歌　ツレワキ「痛はしの御事や。我等都に上りなばよき様に申し直しつゝ。やがて帰洛はあるべし御心づよく待ち給へ

ロンギ　シテ「帰洛を待てよとの。呼ばはる声も幽なる。頼みを松蔭に。音を泣きさして聞きゐたり

三人「聞くやいかにとゆふ波の。みな声々に俊寛を

シテ「申し直さば程もなく

三人「必ず帰洛あるべしや

シテ「これは誠か

三人「なかなかに

シテ「頼むぞよたのもしくて

地謡「待てよ待てよといふ声も。姿も。次第に遠ざかる沖つ波の。幽なる声絶えて船影も人影も消えて見えずなりにけり跡消えて見えずなりにけり